

ドスケベ落語（珍々亭円光の令和しこドエロ話）

ヒロイン

珍々亭円光
ちんちんていえんこう

14～16歳くらい、新人落語家の少女。新人離れした流暢な語りの技をもつ。ちょっと生意気。自信家。お調子者。

声は中音、落語家っぽく、碎けた雰囲気でお願いします。

本作の進行について

落語家の珍々亭円光が、舞台上から観客に向けて噺を披露するという体で進行します。この台本は通常の落語と同じく、円光の語り（地といいます）と、噺の登場人物のセリフで構成されています。

地は円光自身のキャラに沿った演技で、登場人物のセリフは各自に合った演技をお願いします。（円光を含めると一人五役という計算になります）

観客の笑い声は頂いたデータに合わせて演出します。

■トラック1 まん汁怖い

（BGM：開幕）

お初にお目に掛かります。

はなし家
噺家の珍々亭円光と申します。

以後お見知りおきを。

（SE：拍手）

えー、日本語には、頭かしらに処女かしらってつく言葉が色々あるんでございます。

作家の処女作だとか、船の処女航海かいこうだとか、聞いたことがありますかね。

誰も手をつけてねえ林しょじょうりんって意味で、処女林しょじょうりんなんて言つたりもします。

要はモノゴトに手をつける前の、まっさらな状態が処女。

膜を破る前の、ウブなありますことなんですね。

かくいうあたくしも処女落語家でござります。

純愛モノの春画^{しゅんが}…エロ漫画なんかじやあ、

(演技『優しくしてね』のところで急に妹系のアニメ声になつてください)
「優しくしてね♡」なんて、

(SE:扇子を開く音)
涙目でこう、くぱあと。

(演技:素のつぶやきっぽくお願ひします)
てか扇子ってエロくね？ 実質まんこじやね？

開くし、膜張つてるし。

(SE:拍手)

ありがとうございます。

出だしは上々ということで、どうぞ最後までお付き合いくださいませ。

ところで言っちゃあ難^{なん}ですがお客様方、あんまり処女を乗せちゃあいけませんよ。

見習い時代にね、よく師匠に怒られたんですよ。

(演技:師匠はツッコミ役のおっさんです。このシーンは師匠と円光とのかけあいませんで、円光のボケに景気よくツッコんであげてください)

師匠「お前の枕は長すぎる。そんなんじゃあ、いつまで経つても俺の出番来やしねえじやねえか」

だつて仕方ないじやありませんか。ちいとでも顔と名前を覚えて頂くには、長く居座るほかないでしょ？

あたくし言つてやつたんです。

円光「あたくしの枕、そんなに長いですかね。どんくらい長いか、上手い具合に例えてごらんなさいよ」

師匠「そりやお前アレだよ、アラビアのロレンスだ」

円光「なるほど、アラビアのロレンスですか〜。

上手いっ！ さつすが師匠、例えの腕も一人前だ！」

師匠「お、おう。そんなにうまかねえと思うけどよ、褒められて悪い気はしねえな」

円光「まあ、外人のは長いって言いますもんね。三〇センチくらいですかね」

師匠「うん、イチモツの話じゃねえよ？」

ロレンスさんのイチモツ三〇センチもねえよ？」

そういうタイトルの、四時間近い映画があんだよ」

円光「あたくしにもわかる例えでお願いしますよ。

一九六二年制作デヴィッド・リーン監督の名作戦争映画のことなんか、知りませんって」

師匠「うんお前やっぱ知ってるよね？ 詳しいよね映画。

よしじやあアレだ。クレオパトラだ。アレも長いぞ」

円光「そんなに長いですかね。クレオパトラの処女膜」
師匠「え処女膜う！？ 膜って定規で計れるかな～。
ああもうやめだやめだ。この話はやめ」

円光「へえ師匠。この話ってのは、膜の話ですか？」

師匠「映画の話だよ！ あ、違う！ 枕の話だよ！」

円光「へえすみません師匠。そろそろお客様の堪忍袋の緒が切れそうなんで、まくつて参
りましようか。膜の話だけに♡」

師匠「枕の話だよ！」

(S E 拍手)

どうもありがとうございます。こんな感じで、珍々亭円光のドスケベ落語、始めていきました
いと思います。

師匠には枕の話をはじめ、あーだこーだと文句をぶたれたもんですけどね、ぶつちやけあ
たくしそんなに反省していないんですよ。ええ。

こんなことわざがござります。憎まれつ子、世にはばかる。

素直なばかりのいい子よりやあ、ちょっと生意氣なくらいが成功する秘訣つてえこと
で。

あたくしもうね、そちらのメスガキなんざ目じやないくらい生意氣なんでござりますよ。
こんな具合にね。

(演技:思いつきりメスガキになつてください)

雑魚♡ 雜魚♡ 雜あゝ魚♡

雑魚師匠の雑魚ちんぽ、つよつよ弟子まんこの中でイッちやえ♡

(S E :どよめき)
(S E :拍手)

おつと、ここいらで野次が聞こえてきましたね。
なになに……

師匠とやつてんじやねえか。処女落語家ってのは嘘だつたのかよ。援交娘が！
……ふむ。

(演技:にやにやした感じで)

あたくし、珍々亭円光ですからねえ。

まだ聞こえますよ。何？

ヤリマン詐欺師じやねえか。メスガキわからせてやる。孕めオラ：
おいそこのテメエ、今貧乳つつったか？
テメエだよテメエ。立ちな。
誰の胸がナイアガラの滝だオラ！

(演技:急にガラが悪くなります)

(演技:野次の主が世話をなつてゐる支配人だとわかり、驚く)
つて、支配人！？

(演技:急にへこへこします)
いやいやこれは失礼しました。

いやあ、師匠ともども、毎度お世話になつております、ええ。ええ。

でもひどいぢやないですか、おっぱい小さいの氣にしてるんですよ
何？ 小さい方が好き？ 小さければ小さいほどがいい？

…ほうほう、続けてごらんなさい。

なに？ お前のそのミニジンコみてえな乳が大好きだ？

(演技急にガラ悪く)

つてバカ。誰の胸がミニリメートルだオラ！

(演技急に甘えます)

もお、支配人つたらいけず♡ あとで樂屋に来るようにな
これがほんとの、枕営業♡

(S E 拍手)

さて、膜だか枕だかわからんような話をしてるうちに、暖まって参りましたね。
喉がかわいていけねえや。

ここらでお茶でも飲みてえな…つと。

(演技お茶をすする)

ずずず……ふう。

(S E ♂よめき)
(S E 拍手)

喉が潤つたら、お茶請けが欲しくなつて参りましたよ。
どらやき、せんべい、悪くない。

ぜんざい、大福、好きですとも。

でもお茶と来たら日本人はこれ、まんじゅうでしょう。

おやこんなところにまんじゅうが。ありがたやありがたや。

はむ……もぐもぐもぐ。うめえ。

(演技お茶をすする)

ずずず…

(演技:まんじゅうをほおばる)
はむ……もぐもぐもぐ。

(演技:お茶をすする)
ずずず……ふはつ。

(演技:まんじゅうをほおばる。これみよがしに美味そうに)
はあむ……んぐんぐ。

(演技:口の中にまんじゅうが入ったまま喋ります)
あのね、むぐむぐ……さつきからね、袖の方から師匠がね、すっげー顔で睨んでくんの。

(演技:お茶をすする)
ずずず……

だいじょぶだいじょぶ、怖くない怖くない。

師匠はアレです、ツンデレでございますから。

ああ見えてかわいいんですよ。

普段は、干からびたまんじゅうみてーな顔してますけどね。

今日の公演が終わったら、きっとこう言ってくれます。

師匠「つたく。てめえの枕は相変わらず長えな。

だがまあ……悪くなかったぜ。

か、勘違いするなよ、別におめえが好きってわけじゃねえんだぞ!」

あ、勘違いしないでくだせえ。

あたくしは師匠のこと、ぜんぜん好きじゃありませんから。

だいじょぶだいじょぶ、怖くない怖くない。

(S/E:拍手)

渡る世間に鬼はなし、なんて言い出したのは誰でございましたかね。

世には恐ろしい連中ばかりじゃねえ、慈悲深い連中もいるとの意味でございますが、
じひ

さて、眞偽のほどは人によるとしか。

あたくしですか？

渡る世間に鬼はなし、まさしくその通りかと存じます。

だつてそうでしょ？

師匠はツンデレだし、支配人は出番くれるし…

それにね、ここにいる皆々様、とつても優しいんですから！

ええ、ですからあたくしが怖いのは、皆さまの仏頂面だけでござります。

しかし人ってのは、好きも嫌いも千差万別だもんで、

鬼が怖いだの蛇が怖いだの、かつてほうほう勝手方々に抜かすもんですから、

女たちの井戸端会議は、時たまこういうセリフから始まるんですよ。

(演技:「ここからメインの嶄『まん汁怖い』が始まります。登場人物、トキは夫の愚痴をこぼす若い妻です。がさつな江戸っ娘風にお願いします」)

トキ「ちよっと聞いてくれよ？　あたし最近、旦那のアレが怖くってねえ」

つてな具合にね。

旦那の次にアレと来たら、下世話な話は避けられますまい？

どれどれ、ちょいと聞き耳、立ててみましょかねえ。

舞台は長屋の洗い場、愚痴に花咲かす女がふたり…

トキ「ねえ花さん、ちよっと聞いてくれよ？　あたし最近、旦那のアレが怖くってねえ」

(演技:「まん汁怖い」の登場人物、花は近所の女たちの相談役です。ちよっと大人びた低い声でお願いします)

花「どうしたんだいトキさん。

鬼嫁で知れたあんたが、何を怖いっていうんだい。

アレってえとアレかい？

旦那のアレが金棒みてーになつちまつて、毎晩鬼みてえに腰を打つてくるんだよ～って話かい？」

トキ「違うよ、逆だよ逆。全然勃たないんだよ。

おかげで夜はひとりきり、金棒のお世話になりっぱなしつてわけ」

(演技・引き気味)

花「金棒なんて挿れてんのかい？　すごいねあんた」

トキ「棘々がいい具合なんだよ。」

しかし旦那ときたら、まな板の鯉だつて元気に跳ねるってのに、据え膳すえぜん前にしてピクリとも動きやしないのよ。

足開いても乳放り出しても、凧なぎみてえに静かなもんでさ」「

花「ムードもへったくれもありやしないね。足開くってあんた蟹じやねえんだから。んな大雑把じやあ、勃つもんも勃たないよ」

トキ「じゃあどうしろってのさ。このままじや自慢のGカップが浮かばれねえや」

花「ちっちち。トキさん、デカいだけの乳はもう古いのさ。時代はチラリズムだよ」

(演技・疑うように、大げさに)

トキ「チラリズム？」

花「文字通り、女の柔肌やわはだをちらりとだけ見せるつて小技でさあ。

襟足えりあしからうなじがちらり。

かがんだ拍子に谷間がちらり。

着物の裾すそからくるぶしがちらり。

全部丸出しそりか、よっぽどそそられるつて聞くね」

トキ「なんだい、まだるっこしいね。」

結局、男は乳と穴が好きなんじやないのかい」

花「トキさんは身も蓋もないねえ。」

乳も穴も、見せる必要すらないんだよ」

トキ「そりやどういうこつたい花さん。

穴があつたら挿れたい、つてのが男の性じやないのかい」

花「考えてもみなよ。

野郎どもはガキの頃からスケベではあつたが、いつでも挿入できたわけじやなかつた。相手がいねえからな。かといつて性欲はありあまつてる。

できることつて言やあ升かきます、オナニーしかねえ。

穴にぶち込むのを夢に見ながら、道行く女の、ちらりと見える谷間やうなじを、食い入るよう^{わこうど}に焼き付ける。それが若人わこうどつてもんだ」

トキ「まさか、旦那に升をかかせろつてのかい?

バカ言つちやいけねえ!

花さん、あたしやセックスがしたいんだよ。

出会つたばかりんときみてえな、ドスケベセックスがしたいんだよよ!」

花「最後まで聞きなさいよ。慣れつてのは恐ろしいもんでね、どんなに豪勢なごちそうだらうと、三日も食べば飽きちまう。

トキさん、あんたら何年目だい」

トキ「ことしで三年になるね。…あたしや飽きられちまつたのかい?」

花「いづれはそうなる。三年ならもつた方だよ。ヨリさんとこはひと月もたなかつた。

だが野郎をもつべんその気にさせる方法があるんだよ。つまりね、野郎を若人にするんだ。

原点回帰、童心に帰らせるのさ」

トキ「なるほど…だからオナニーなのかい…」

(演技方説します)

花「ちらりと見えるうなじ、谷間!

旦那はいちいち意識しちまう。昔はあれで夜ごとしごいてたなあ…ちらつとだけつてのがまたロマンなんだよなあ…たまには升でもかいてみるか…

一人の夜を続けた旦那は、じきに一人じゃ満足できなくなる。

白いうなじの襟足を下げる、女の背中を揉みたい。谷間が覗く前を開いて、小山をまるごと揉みたい。夜ごと鍛えたイチモツを、あなたの中に収めたい……！

出会つたばかりん時みてえに、ドスケベセックスができるって寸法だ」

トキ「すげえや花さん！」

一周回つてドスケベセックスに帰つてきちゃった！」

まるで戦国の軍師みてえだ」

花「エロ孔明と呼びな。策が決まつたら即ち行動。すなわち

帰つて旦那にかましてきな」

トキ「うん！こんな感じでいいかい？」

(S E 窓子を開く音)

花「だから乳を放り出すなちゅーに」

時は流れて、三日が経ちました。

所変わらず井戸端会議。

トキと花がいつものように、駄弁を交わしておりますところに、もつべん耳を傾けましょう。

トキ「いやあ、さっすが花さんだ。
旦那つたらもうすっかり虜になつちまつてね。上手くいったよ。
始めのうちは加減がわかんなくてさ、
乳首がポロツポロこぼれちまつたがね」

花「あんたの乳首は玉子ボーロかい？
ま、上手くいったんなら結構なことさ」

トキ「おうとも。おかげで毎夜腰まいよが止まんなくつてさあ」

花「ふむ。いくら楽しいからって、毎日おんなじことの繰り返しじやあ、こないだの二の舞

だよ」

トキ「心配いらないよ。ちつとずつ変化つけんのが、スケベを楽しむ秘訣なんだよ。
昨日なんかは、金棒でえらく盛り上がりがつちやつてさあ」

(演技・引き気味に)

花「あんた金棒好きだねえ〜」

トキ「あたしより旦那が好きなんだよ。

ぶつとい方から尻にぶち込んでやるのよ」

花「あんた本物の鬼じやないのかい？」

トキ「いやそれがエラく喜んでるのよ！ 棘々がいい具合なんだってさ」

(演技・引き気味に)

花「そりや……名器だねえ〜」

トキ「普段は大黒柱だつてふんぞり返つてるくせにさあ、

床の上じやあ、女みたいにぴーぴー泣くのよ。

痛いよ痛いよ〜、もうよしてくれ〜つてさあ、布団濡らして情けないのなんの！
アーハッハッハッハッハ、たまんないねえ！」

(演技・引き気味に。観客だけに向けて喋るように)

花「本物の鬼がいるよ。

鬼に金棒なんて言い出したのあどこのどいつだよ〜、
絶対持たしちやいけないやつだよ〜」

トキ「鬼に金棒といやあ花さんこそ。

ああ気を悪くしないどくれ。

あんた美人なうえに知恵もあるからさ、世渡りも怖いもんなしじゃないのかい？」

花「おやおや買い被りだよ。渡る世間は鬼ばかり。

顔がよくたつて知恵が回つたつて、どうにもならねえことはあるもんさ。

あたしや顔色伺いの毎日だよ」^{うかがい}

トキ「へえこりや意外だね。あの花さんにも怖いもんがあるときだ。
何が怖いか当ててみせようか」

花「問答かい。受けて立つよ」

トキ「ヒントをおくれ。最初の文字は“あ”だよ」

花「いきなりかい。最初の文字はなんだい」

トキ「はい！ アナル！」

花「早いねえ！ 違うよ」

トキ「はい！ アヌス！」

花「おんなじじゃないか。違う違う」

トキ「うーん…青い尻…？」

花「いつたん尻から離れないかい？」

もう答え言つちまおうか。“兄貴”だよ」

トキ「驚いたね。花さん、兄貴がいたのかい」

花「知らないくて当然さね。働かなければ散歩もしない。

部屋から一步も出やしないんだ。

もう二十九になるつてのに、無駄飯食らいのヒキニートでね」

トキ「困った兄貴だね。で、そのクソ兄貴がどしたい。

夜な夜な枕元ん立つて、尻穴見せつけてくるのかい」

花「だから尻から離れろつづーんだよ。あなたの口は肛門にあんのかい？
…言うなれば、兄貴の怖いもん知らずなところが怖いね。

あんたの言うとおりクソ兄貴だからさ、家族だけじゃなくて、世間サマの風当たりも強いわけよ。陰口や落書きは当たり前、石投げ込まれんのも慣れちまつた。

とうとう業を煮やした親父が、兄貴をぶん殴って説教したわけさ。

しかし兄貴の奴あちつとも懲りやがらねえ。今も絶賛引きこもり中だ。

何考えてんだか見当もつかねえ。

いつぺんウチから叩き出してやろうかと思つてんだ」

トキ「おやまあ豪胆なんだか何なんだか。

周りの目も効かねえ、親父の鉄拳も効かねえとくりやあ、相当の怖いもん知らずだねえ。逆に考えりや、一個でも兄貴の怖いもん見つけりや、叩き出すチャンスになるかもしんないよ。

花さん、兄貴に怖いもん聞いてみなよ。用意できるもんならあたしが協力するからさ」

花「えへ、しばらく口も聞いてないからねえ。答えてくれるもんかどうか…」

トキ「任しといてよ！ なめくじやゴキブリだったら、いくらでも持つて来てやるよ！」

花「(演技:引き気味に)

どんな家に暮らしてんだい？

ま、モノは試しというじやないか、やつてみようかね」

さて、今度は花の兄貴を見てみましょう。

昼間つからカーテン締め切つちゃつて、陰氣なことこの上ない六畳間でござります。

ここに主のむさい男が、ウンウンうなつてているところでございます。

(演技:花の兄貴はアクの強いニート侍です。芝居がかつた太めの声でお願いします)

兄貴「うーん。うーん、困った困った。

男「貫^{おとこじゅつかん}二十九年、拙者はありとあらゆる一人エッチを試してたでござる。

(演技:調子をつけて、テンポよく)

角オナ床オナオナホール、左手手コキにセルフフェラ。立てば放尿座れば座薬、ネットの海では絶倫侍…。

されど満たされぬ、満ち足りぬ。

一人エッチの第一人者として、トップブロガーとなつた拙者でござるが…

一人エッチにはもううんざり！

一日に十回！ そりや飽きたでござるよ…

ゴミ箱もティッシュで溢れかえってござる！

童貞も貫けば、魔法使いになれるとは申すが、このままでは心のチエリーも干からびるというもの。

はあ、誰ぞ、誰ぞこの乾きを癒やしてはくださらんか…

(SE:扇子で床を叩く・ノックの音)

花「兄貴、兄貴ー。ちよいといいかい」

兄貴「む、花か。拙者いま忙しいでござる」

花「(演技:観客にだけ聞こえるように、ぼそっと)
何が忙しいもんかいヒキニートが。

(演技:兄貴へ呼びかけます)

ちよいと、話があんだけどさ」

兄貴「働きたくないでござる！」

花「まだ何も言っちゃいないよ。

兄妹水入らずなんだ、働けなんて今さら野暮言わないからさ、

ちよいとドア開けとくれよ」

兄貴「そうやつて拙者を油断させようとしてえー。めつ！ でござるよ！

そこに父上が控えておろう！ 拙者が鍵を開けた瞬間殴り込む算段であろう！
かーつかつかつか！ 妹の目論見、破れたりー！」

花「(演技:観客にだけ聞こえるように、ぼそっと)
ぶん殴りてえー。

(演技・咳払いをしてください。咳払いの後は兄貴へ呼びかけるセリフです)
ンンっ

父上なんていやしないよ。話つてのは、そうさね。
たまには兄貴の好きなもんでも、差し入れようと思つてね。
何か欲しいもんはあるかい?」

兄貴「むむ、怪しいでござるな。妹よ、何をたくさんでいる」

(演技・不満そうに)

花「別に、何もたくさんじやいないよ」

兄貴「嘘でござる! 父上と結託して拙者を嵌める算段にござろう!
拙者は侍! 暴力にも誹謗中傷にも、絶対に屈しないでござる!
何も怖れるものはないでござる!」

(演技・花の演技を信じ込んで動搖しています)
花「兄さん…どうして…うううつ…」

(演技・花の演技を信じ込んで動搖しています)

兄貴「ど、どうしたでござるか。泣いてる、で、ござるか」

花「どうして信じてくれないんだい。血の繋がった兄妹だろう。
嘘なんてつく必要ないじやないか
…ただ、兄貴と、仲良くやりたいだけなんだよ…」

兄貴「う…嘘でござろう…」

花「お前、いつも拙者をゴミでも見るような目で…」

花「兄貴の方こそ、嘘つきだよ」

兄貴「なん…だと…」

花「ねえ兄貴。怖いもんなしなんて嘘っぱちだ。

ほんとは、外の世界が怖くて仕方ないんだろう。

なんもかんも怖くって、だけど怖がつてると格好がつかねえから、

なんにも怖くねえってフリーで閉じこもつてるんだ」

(演技:侍キャラが剥がれかけて、素が現れています)

兄貴「そりや…おめ…そんなこと…
ちつたあ、あるかもしんねえけどよお…」

花「ごめんよ兄貴、何年もほっぽらかしちまつてさ。
あたしも怖かったんだよ。
この部屋のドア、無理やりあけちまつたら、
取り返しのつかねえ事んなる気がしてさ」

兄貴「花…おめえって奴あ…」

花「教えとくれ。いつたい何がそんなに怖いんだい。
正直に答えてくれよ。怖がったつていいんだ。
あたしがぜんぶ、蹴散らしてやるからさ。
大丈夫。兄貴はあたしが守るよ」

兄貴「(演技:『すん』は鼻をする音)

すん:できた妹を持つたぜこんちくしょく。

(演技:ここから花に聞こえないように独り言つぽく)
いや待つでござる。これは陰謀にござる。

妹の奴め、拙者から怖いものを聞き出して、いつたいどうするつもりでござろうか。
もしナメクジが怖いとでも申したらどうなる?
すやすやと眠る拙者の上に、天井裏からナメクジの雨が降つてくる、など。
…うむ、ありうる。

危うい危うい。騙されるところでござつた。

しかし話の流れ、何某か怖いものを言わねばなるまい…うーむ」

花「昔の話だけどね兄貴。

雨の日にやあ、ナメクジが怖いつつて、ピーピー泣いてたじやないか。
まだ怖いんじやないかい?

雨の日あ、あたしがついて歩いてやるからさ、心配いらぬいよ」

兄貴「ナメクジは大好きでござる。」

拙者ナメクジで毎日致して候いた」

(演技:引き気味に)

花「そ…そりや奇特きとくだねえ。じゃ、じゃあゴキ…」

(演技:食い気味に)

兄貴「ゴキブリも大好きでござる。」

拙者ゴキブリで毎日致して候いた」

花「(演技:ドン引き)

ええ…?

じゃあ父上の鉄拳は? 近所の悪口はどうだい?」

兄貴「大好きでござる。」

拙者、父上の鉄拳と近所の悪口で、毎日致して候!」

花「嘘つけよバカ兄貴! そんな奴どこにいんだい!」

兄貴「しかあし! そんな拙者にも、一つだけ怖いものがある」

(演技:ちょっと嬉しそうに)

花「ほ…。それってのはなんだい」

(演技:『まん汁』のイントネーションは『今週』と同じです)

兄貴「まん汁じゅうでござる」

(演技:最初の『まんじゅう』は『今週』と同じ、次の『まんじゅう』は『饅頭』と同じイン
トネーションで)

花「まんじゅう…? まんじゅうかい? あのすべすべの」

兄貴「いや、ぬるぬるでござる」

花「ぬるぬる！？ あんこが中に入ってるやつじゃないのかい」

兄貴「まんこの中から出てくるやつでござる」

(演技『まんじゅう』は『今週』のイントネーションで。引き気味にお願いします)

花「まさか兄貴、まんじゅうってのはその、アレかい。愛液のことかい」

兄貴「左様。まんじる、とも読める、まん汁でござる。

拙者、女性の膣内より分泌される、得体の知れぬ液体が怖くて仕方ないでござる」

花「ま、まん汁が怖いって…どうしてまた」

兄貴「あれは^{よわい}齡六つの折り、^{しわす}師走の夜でござった。

拙者は父上の^{めい}命により、年越しそばを買^うべく、

寒空の街道を、^{ひきやく}飛脚よろしく走っていた」

(演技:ちよつとめんどくさそうに)

花「おいおい、なんか始まつたよ…」

兄貴「道の途中で、独りうずくまる女を見かけた。

ケガか病か、産気づいたか：いずれにせよ放ってはおけん。

拙者は足を止め、何ごとか尋ねた。

すると女は、おもむろに立ち上がった。

長い髪だった。顔は紅潮していた。女は羽織っていた大きな衣^{ころも}をはだけた。

女の裸は拙者の目を焼いた。すべらかで、夜空の白雪^{しゆゆき}も鮮烈だった。

だが真に恐ろしかったのは、股ぐらであった。

女はそこを指^{ゆび}さして言った。

『わたし、きれい？』

股ぐらには裂け目があった。

深く、赤く、ぬらぬらとした液体が滝のように零れていた。

それが、まん汁という液体であることを知ったのは、また後のことにござるが、その時以来、拙者的心には消えない傷が刻まれてしまつた」

花「そんなことが…かわいそうに。だからまん汁が怖くなつちまつたんだね。でも、まん汁女なんてどこにもいやしないよ。そりや、あの夜だけの災難さね」

兄貴「嘘だつ！」

今もどこかでうずくまつて、拙者を怖がらせようとしてるに違ひないでござる！」

花「（演技：優しく、心配するように）

困つたねえ…でも待つてておくれよ。

（演技：戦意に燃える感じで）

いつか必ず、部屋から出したげるからさ…」

所変わつて、女ふたりの井戸端会議。

トキ「ぶははは！ まん汁が怖いだつて？」

面白い兄貴だねえ。なあにまん汁くらい今すぐだつて用意してやるよ。それそれ」

（SE：袖をばさばさする音）

花「トキさんやめなさい。雀がぜんぶ逃げてつたじやないか。
だいいちね、疑わしいと思わないのかい？」

まん汁が怖くて家から出られねえなんて、バカバカしいことこの上ないよ。

あのクソ兄貴、凝つた作り話こさえて何考えてんだか。

もしかしたら逆張りなのかもしれないねえ」
ぎやくぱり

トキ「花さん、そりやどういう意味だい」

花「兄貴の野郎は死ぬほどひねくれてるからよ、

なんであたしが嫌いなもん知りたがつてんのか、感づいてるのかもしれない。
つまり、あたしが兄貴の嫌いなもん使つて、兄貴を追い出そうとしてるつてことに、気づいてんだよ。

野郎、大好きなもんを大嫌いって、大好きなもんを用意させようとしてんだ。そうは問屋が降ろさねえつうの」

トキ「へえ、裏の読み合ひってわけかい。さすが花さん、あつたまい！」

花「とはいえ、どうやつて兄貴の鼻を明かしたもんかねえ」

トキ「難しいこたねえ、まん汁を用意してやろうじやないさ」

花「へえ。その心は？」

トキ「天井裏から忍び込んでさ、天井開けてさ、すやすや寝てる兄貴の口ん中につき、滝みてえにまん汁流し込んでやんのよ！ 溺れ死ぬくれえにさあ！ んで死にかけた兄貴が言うんだよ、まん汁怖いってね！」

(演技:ドン引き)

花「あんたの発想が一番怖いよ。屋根裏からまん汁垂らすの？ 怖っ！」

人間じゃないよ、珍獣だよもう」

トキ「悪くないと思つたんだけどね」

花「待ちなよ。アイデアは悪くないんだ…

うん、もしかしたら、兄貴をぎやふんと言わせられるかもしれない」

トキ「ほうほう、さつすがエロ孔明だ。その心は？」

花「かくかくしかじかって具合だね」

トキ「なるほど！ そりやちんちんまんまだ！」

すみませんねえ皆々様。気になる作戦の内容は、お楽しみにってことで。
時計の針を進めまして、その晩でございます。

所は花の兄貴の部屋、芋虫みてえに布団にくるまつて、
何が嬉しいんだか、今か今かと待ち構えている様子で…

(演技:そわそわして寝付けない)

兄貴「はああ…はああ…

まだでござるか、まだでござるか。

天井裏からまん汁を垂らしてくれる女はまだでござるか！
もう待ち遠しゅうて待ち遠しゅうて、
オナ禁一時間にして先走り汁が止まらないでござる。

(演技:ジングルベルのメロディで)

ちんちんちん ちんちんちん 汁が出る♪

まん 汁 潮吹き クリトリス♪

(演技:ウキウキの兄貴。思いつきりキモくしてください)

む、何やら天井から音がするでござるよ。
はてはエツチなネズミちゃんかな？

拙者も狸寝入りするでござるよ〜

(演技:実際にすやすやと言つてください)

すやすやすや、あそれ、すやすやすや…

(演技:やや抑えた声で)

音が、真上にきたでござるよ。

天井の板が外れたでござる。

ごそごそと、衣擦れの音が…

お、お、お…

き、キターネー！

水が、水が、額にぽたりと落ちてきたでござる！

あ、もうちょっと下でござる…

そう、そこは眉間、そこは鼻…そして口にい…

入った！

(演技:実際にごくごくと言つてください)

ごくごくごく、あそれ、じくじくじく

ふう…これがまん汁でござるか。

思つたよりも粘り気が強く、しょっぱいというか苦いといいうか…
美味いとはお世辞にも言えぬが、

この酷い味のする液体が女子の穴から漏れ出でると思えば、

背徳オナニーもはかどるでござるよ…！

(演技・実際にごくごく・しこしこと言つてください)

ごくごくごく、あそれ、しこしこしこ…

(演技・降りかかった大量の液体にむせます)
むほっ！ ごほっ、んごつ：

い、一気にキタでござる。

まさか絶頂でござるか！

潮吹きであらせられるか、女子よ！

けしからんなあ、天井裏でまん汁垂らす変態女め！
うひよひよひよ、拙者もすぐにいくでござるからね（おなご）

(演技・実際にしこしこ言つてください)

しこしこしこ、しここのこと！

ぴゅーっと出た…！

ふおお、勢いよすぎて、ンん、口の中に入つたでござる…！
んほく、酷い味でござる！

ん…むむ…？

この味。はて、んん…？

(演技・口の中のものを吟味する音をください)
くちやくちやくちや

(演技・飲み込む音をください)
ごくん

同じ、だと？

まん汁と同じ味、だと？

はて…どういうことで「アガル」か？

拙者のちんちんはまんまだつたのか…? 上から物音が、ごそごそと。

おなごよ、
斯様にハツスルしては、

おなごよ、斯様にハッスルしては、天井板もかわいそうでござる。かよう
ギシギシ言つてるし、あ、なんかヤバい音する。

ちょ、ま、あの、なんか釘つぽい
あ、ちょ…大丈夫でござるか！？

（演技・天井裏の何者かが落ちてくる）
うおあーーー！

…あたたた、言わんこつちやないでござるよ…

おなご 女子よ、ケガはないでござるか…

暗くてよく見えないでござるな。

三
一
九
八
七
六
五
四
三
二
一

なぜにおっさんがいるでござるか！

尻に、尻になんか刺さつてる！

なぜ勃起しているでござるか！？

そこは出者の市団ござざる！

テヨ 来るなケタモノ！

ひいき!

花「おやおや兄貴。慌てて部屋から飛び出して、いつたい全体どうしたんだい。」

兄貴「花！助けてくれっ！」

な、な、なんか知らないおっさんが天井から落ちてきて、それで、それでっ！」

花「変な兄貴だね。おぼつかないと言ふんじゃないよ。

それでもイカ臭いねえ。升かいてるうちに、夢でも見たんじゃないのかい」

兄貴「まさか、花、お前全部…なんて怖ろしい妹だ。

(演技悔しそうに)

……つづくう〜〜〜、完敗でござる…！」

花「はて、何の話だか見当もつかないね。

兄貴が怖いのは、まん汁だけじゃなかつたのかい」

兄貴「すまん、拙者嘘をついた。

ちん汁が一番怖い」

おあとがよろしいようで。

(S.E.拍手)